

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	現代日本の住宅作品における建築と敷地の図形的対応関係
Title(English)	
著者(和文)	遠藤康一
Author(English)	Koichi Endo
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:乙第4139号, 授与年月日:2017年3月31日, 学位の種別:論文博士, 審査員:奥山 信一,安田 幸一,塚本 由晴,山崎 鯛介,村田 涼
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:乙第4139号, Conferred date:2017/3/31, Degree Type:Thesis doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

報告番号	乙 第 号	学位申請者	遠藤 康一	
	氏 名	職 名	氏 名	職 名
論文審査員	主査 奥山 信一	教授	村田 涼	准教授
	安田 幸一	教授		
	塚本 由晴	教授		
	山崎 鯛介	准教授		

本論文は、「現代日本の住宅作品における建築と敷地の図形的対応関係」と題し、以下の6章で構成されている。

第1章「序論」では、研究の目的、背景、方法、論文の構成を位置づけた上で、本論文が、現代日本の住宅設計における基本条件の一つと考えられる建築と敷地との間に一体的に取り結ばれる対応関係により成立する建築形態の図形的な水準での意匠表現を検討するものであることを述べ、その際に敷地に関する基本要素として敷地境界と地面を設定し、建築の図形的な意匠表現として平面、立面、断面に着目すると同時に、敷地とそれらの図形との関係を端的に捉え得る条件の局限化を図ることで資料範囲の論理付けを行っている。そして、敷地境界と平面輪郭、地面と立面形および断面形との対応関係を図式として捉え、類型を抽出すると共に、それら相互を比較検討することから、現代日本における建築と敷地の図形的対応関係の特徴とその枠組みを明らかにすることが本論文の目的であると位置づけている。

第2章「敷地境界との関係にみる住宅作品の平面輪郭」では、不整形敷地に建つ住宅作品を対象に、平面輪郭と敷地境界との全体的対応である互いの形状の近似性を基準とした適応関係と、部分的対応である双方を構成する線分同士の間隔関係を、それぞれ平面の図形的な性格を規定するものと位置づけ、それら双方の組合せを検討している。その結果、全体的対応と部分的対応が一致して敷地境界と調和的あるいは対立的な対応関係を示す類型が大半を占める中で、全体的対応と部分的対応が一致しないあり方、および双方が補完されるあり方が、上記の調和的および対立的な対応関係を相対化するものであることを明らかにしている。

第3章「住宅作品における立面の接地性」では、立面が前面道路に直接面し隣家に近接する一面接道の住宅作品を対象に、立面形について、立面の外形線を第一輪郭、第一輪郭に接する開口で切り取られた外形線を第二輪郭とし、それら第一輪郭と第二輪郭の関係から輪郭パターンを、立面形と外構床との関係について、基礎の形態と素材の類似性および動線と視線による連続関係から連続モデルを、それぞれ立面の図形的な性格を規定するものとして位置づけ、それら双方の組合せを検討している。その結果、立面形においては第二輪郭が重なることで不安定形となる傾向があり、この不安定形の類型は外構床との関係にかかわらず成立するが、安定形のものには外構床との素材の類似性が加わることで安定性がより強調される傾向にあることを明らかにしている。

第4章「傾斜地における住宅作品の断面構成」では、傾斜地に建つ住宅作品を対象に、断面形の接地性と、斜面とアプローチの向きとの関係およびエントランスと主室等の配列の方向性の組合せから検討している。その結果、断面形と斜面が分離したものでは、アプローチの向き、エントランス、主室が同一方向に水平に配列されることで斜面の方向性が強調されるものが多いのに対し、断面形と斜面の形状とが一致するものでは、アプローチの向き、エントランスと主室等の配列に関する規則はなく、斜面の方向性に対し多様な関係を形成する傾向を明らかにしている。

第5章「建築と敷地の図形的対応関係」では、局限化された敷地の特性に対する建築の図形的な適合性の観点から、2章における調和と対立、3章における安定と不安定、4章における分離と一致といった、それぞれの対応関係を図形的に規定する性格を比較検討することにより、各章で得られた類型を同調と対置、およびそれら双方がみられる相対的なあり方のなかに位置づけ、それぞれの特徴を類型間に共通する対応関係の操作の重ね合わせから考察している。その結果、平面輪郭では従ヴォリュームの付加により同調に働く傾向を、立面形では第二輪郭の形状により対置へと働く傾向を、断面形では同調と対置が独立して特化される傾向を見出すことより、現代日本の住宅作品において、建築の平面と立面の図形では部分の操作が加わることでそれぞれ対極的な一定の性格へ移行するのに対し、断面の図形では操作の重ね合わせに因らず図形の不変的な性格が保持されることを明らかにしている。

第6章「結論」は、本論文で得られた知見を総括している。

これを要するに、本論文は、現代日本の住宅作品における建築と敷地の図形的対応関係を、平面輪郭、立面形、断面形それぞれの操作として捉え検討することで、現実的には三次元空間を前提としながらも構想段階では二次元の基本的な図面表現に内在している図形の特徴と呼応しつつ進められる建築デザインの創造的側面の一端を明らかにするものであり、今後の建築意匠学を展開させる有益な指標となりうると共に、常に現代性が求められる建築設計分野における方法論を批判的に構築するための論理的基盤となりうることから、工学上および建築学上貢献するところが大きい。よって本論文は、博士(工学)の学位論文として十分な価値があるものと認められる。